

サポートグループ「してもの会」における Respectful Racial Dialogue の実践
－ 在日コリアンと日本人の「分断から動き出す交流」 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
朴 希沙

近年在日コリアン（以下、「在日」）に対するヘイトスピーチの広がりが増えている。「在日」に特有の心理社会的困難が存在していることは主に社会学領域において指摘され続けてきたが、「在日」に関する心理社会学的研究の蓄積は少なく特に支援に踏み込んだ考察は十分に行われて来なかった。

本研究の目的は、「在日」の心理社会的支援に示唆を与える新しい対話実践「Respectful Racial Dialogue」を提唱することにある。この概念は「在日」のためのサポートグループ（してもの会）を対象に、M-GTAを用いた分析を行ったことによって浮かび上がってきたものである。

結果と考察においては、一人の人の中で「社会」と「個人」がリアリティを伴って結びつく時に、視野の広がりがある種の「自由」が生じていることが示唆された。またその結びつきを可能にしているものは、個々人が持つ悩みを起点とする実践や具体的な人と人との「ぶつかりあい」に支えられた交流であった。そして、分析テーマの3つのコアカテゴリーを内包する概念として「Respectful Racial Dialogue」を提唱した。その特徴は、①人種に関する経験に対して意識的であること、②苦闘する生に対する敬意、③応答しあう関係としての対話である。これらは無価値化されがちな「在日」の語りをエンパワーすることや、対話を通して自らが変化する可能性に開かれていることを重視した実践の在り方を示しており、今後の「在日」への支援において応用できる可能性を持つと考えた。